

2020.05.18

今日は聖書の箇所ではなくて、出来事の分かち合いをしたい。イタリアでは3月9日月曜日から公開ミサができなくなった。3月8日日曜日の晩に通達が出て、翌9日から急に状況が変わった。今日、5月18日は2ヶ月ぶりに公開ミサが行われた。といっても、カテドラルでのミサは色んな組織の人たちが参加するもの(イタリアならでは?)で、象徴的なものだったように思う。

今日のミサでは私たち司祭の共同司式は許されなかったし、パイプオルガンも鳴り響かなかった。少し前のFBで「私にとってはカテドラルでパイプオルガンが鳴る中、公開のミサができるようになったとき、一つの区切りを感じられるのだと思っています」と書いたが、これは自分の思い上がりであったことを今日のミサで感じた。

コロナ前とコロナ後で、聖堂とミサの様子がどのように変わったかという、「入り口と出口を分ける、入るときも一定の間隔を保つ、もちろん椅子は指定されたところに座る、カリスは前もって蓋をしておく(飛沫感染を防ぐため?)、聖体拝領の前にアルコール消毒をし、右手はゴム手袋をする」といったところであろうか。イタリアの華々しい儀式!はしばらく見られないだろう。



#### (1) 共同司式ができない

私にとってこの2ヶ月は「内輪」でのミサだったので、特に気にせず仲間と「共に」ミサを捧げてきた。しかし、カテドラルでの共同司式となると色んなところから人が集まってくる。気づかずにコロナウイルスを運んでくる人もいるかもしれない。恥ずかしながら、実際にこの状況に身を置くまで、このことに意識が向かなかった。日本の教会で繰り返されている「すべてのいのちを守るため」という教皇訪問のフレーズを、私はようやく実感できたのである。共同司式をしたいという思いは、自分の思いであって、「すべてのいのちを守る」という視点が抜け落ちていたのだ。

#### (2) パイプオルガンより大切なものがある

先に書いたように、イタリアの華々しい儀式をイメージしていた私(音楽が好きなのでパイプオルガンを例にあげてしまった)にとって、何が本質かを改めて考えさせられる機会になった。確かに、雰囲気を作ることは大切かもしれない。司教ミサの時は香を使ったり、杖や帽子、聖歌隊が当たり前のようにあった。でも、今日は何もなかった。

よく考えれば、イエスさまの「最後の晩さん」のときは立派な音楽や素晴らしい祭服、華やかな装飾など何もなかったのだ。ただ、そこにパンとぶどう酒があって、弟子たち、つまり「人」が集まっていた。今までは当たり前のように参列者がいて、共に主の食卓を祝っていた。しかし、コロナ禍によって、「会衆が集まると・・・」で始まるミサの典礼注記そのものが成立しなくなっていたのだ。愚かな私は、「なくなって初めてそのありがたみを痛感する」ので、「会衆」と共に捧げるミサがどれだけ大切なことかを、改めて意識することができた。

日本でも場所によってはミサが再開されるだろう。そのとき、私たちは「共に集えること」がどれだけ恵まれたことかを感じられると思う。「私にとって、『ミサの場』に実際にいられることがどれだけ恵み深いことか」を分かち合ってみても良いのではないだろうか。